

リニア・藤野トンネル工事

残土置き場 道志川沿岸

相模原 横浜水道取水口近く

毎日新聞
2007年6月25日

JR東海が2027年中の開業を目指すリニア中央新幹線で、相模原市内に計画される藤野トンネル(延長約10.5キロ)の掘削工事で排出される建設残土の捨て場の予定地が判明した。相模原市緑区の道志川沿岸の砂利採取場跡地2カ所で、近くには横浜水道の取水口がある。地元住民グループが24日、記者会見して明らかにし、水源近くになる設置計画を批判した。

【高橋和夫】

残土捨て場の予定地は、2カ所とも相模原市緑区にある砂利採取場跡地で、同区寸沢嵐新戸の「東清礫業」の跡地(広さ約29万平方メートル)と、緑区牧野奴田ノ原の「フジノロック」の跡地(約4万平方メートル)。残土量はそれぞれ約56万立方メートルと約79万立方メートルを計画している。

従来の計画では、残土捨て場は道志川から

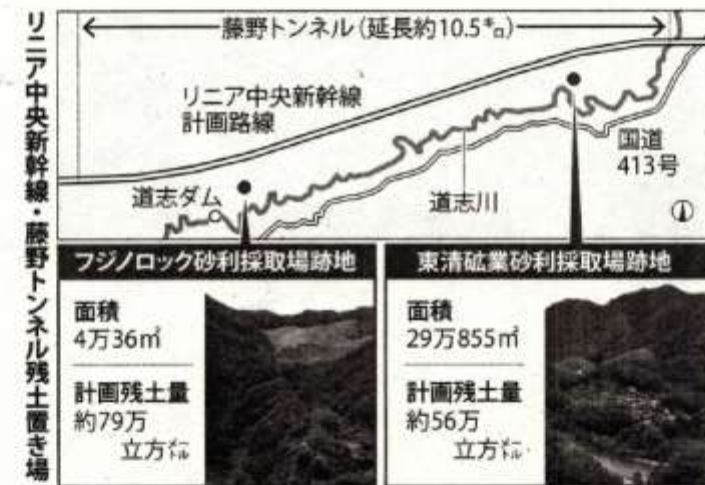
離れた別の場所にあつたが、JR東海が残土を運搬するタンクカーの県道の通行量を減らすため変更した。今回明らかになった2カ所は、残土の排出口にもなるトンネル非常口の近くで、今年4月に地元住民に説明した。計画地近くにある横浜水道の鮎子取水口は毎秒2リットルを取水し、河水は横浜市旭区の川井浄水場に送られて主に横浜市旭区や緑区、瀬谷区、青葉区などに供給されている。この日会見した住民グループ「リニア新幹線を考える相模原連絡会」は「管理がきちんとされず豪雨で残土が大量に流出すれば、道志川に流れ込む。横浜水道の汚濁、水質悪化だけでなく、一時的にも取水不能となる心配もある」と計画の変更を批判した。

また、JR東海は住民に対し、「採石業者が残土管理の安全を確保する」と説明。JR東海の計画を了承した

相模原市は「残土の処理方法、安全性について採石場の市道、監督を行う」としている。これに対し、同会メンバーで緑区牧野に住む河内正道さん(70)は、「JR東海は発生残土の事業者責任を放棄して丸投げするので、きちんと管理ができるのか」と疑問を呈す。別の同会メンバーで、元旧城山町議の松本三望さん(78)は「未

曽有の豪雨がれば、捨て場から残土が流出する可能性もある。残土流出が発生すれば、事業者であるJR東海の責任は免れない。事業者自らが安全策を講じるべきだ」と指摘している。

JR東海は県の条例に基づいて、残土捨て場の環境アセスメントを行う必要がある。また、相模原市の残土条例では、残土発生事業者の管理責任が明記されているため、残土処分管理についての調整が今後必要になる見通しだ。



同会代表の浅賀きみ江さん(69)は「横浜市は上流部の道志川に水源涵養林を持っているが、北丹沢山地などの山々を含めた流域全体が道志川の水源域だ。横浜市にも、横浜市民の命の水をはぐくむ水源として、流域開発などの環境変化に大きな関心を持ってもらいたい」と話している。